

満島神社の由来と

お練り祭り

社格

満島神社の由来とお練り祭り

満島には、地区全体としてまつる神社として、北のはずれの通称「原の森」に満島神社があり、南のはずれの通称「南の森」に前宮（ようはいじよ遙拝所）があり祭りの時にはおたびどころ御旅所として使われる。

こうした形が生まれたのは、明治41年神社こうし合祀によって、地区内の各所にあった神社を統合してからである、それ以前の神社は表のように田村地籍（現在の保育園の場所）にあったこうだいじんじや皇大神社、すわしや諏訪社を村社とし、他は村内の旧家ないしそれを取りまく一派（親族）によって祀られていた。

村社であった皇大神社、諏訪社も、明治5年までは旧家の氏神だった。中でも遠山家は近世初期まで遠山地方（満島村、鶯巣村を含めた遠山6か村）と統治した領主遠山氏の流れをくむ家系で、「本長野」「御家」の両家は元和4年(1618)改易後に満島番所の番人をつとめ、宮沢両家は遠山氏のもとねぎや禰宜家として代々ムラの祭祀をつかさどった家である。

旧神社名	祭神	旧所在地	旧祭日	旧祭り手	現在地
皇大神社 諏訪社	天照大神 建御名方神	旧田村地籍	7月27日	村	満島神社本殿
諏訪社	建御名方神	原地籍（原の森）	9月16日	遠山家（大久保）	満島神社本殿
稻荷社	宇迦之御魂神	同上	旧2月初午日	同上	満島神社脇殿
浅間社	木花之佐久夜毗命	原地籍		足利家（松葉）折立	足利家（折立）
八幡社	誉田別命	長野地籍	11月15日	宮沢家（禰宜屋）遠山家（本長野）	満島神社本殿 宮沢家
八坂社	須佐男命	南地籍	7月14日	宮沢家（天王）	満島神社本殿 宮沢家
南大神（南宮社）	大山祇命	南地籍（旧南の森）	8月15日	遠山家（御家） 遠山家（大南） 板倉家（板倉一派）	

山の神	大山祇命	南地籍		板倉家 (板倉一派)	南の森上方
-----	------	-----	--	------------	-------

神社合祀は、明治 32 年頃に合社の議がもちあがり、明治 41 年に村社の皇大神社、諏訪社を移転し、^{むかくしゃ}無格社の諏訪社、稲荷社、八坂社、南大神 (南宮社) を合祀して「満島神社」とした。のちに八幡社も合祀された。

このように神社合祀によって個人持ちだった神社はムラ全体の神社になったが、その一方で宮沢両家では八幡社と八坂社を屋敷内に分祀し、本長野遠山家では八幡社を分祀して今も氏神としている。^{せんげんしゃ}浅間社は合祀せずに足利家が屋敷横に引き寄せて祀っている。また板倉家の氏神山の神上方に移転されたが、もとの社地は満島神社に寄付され、前宮として新たに「南の森」とよばれた。ここに村内にあった秋葉大権現、金毘羅大権現や水神、のちに水天宮などの雑神が集められて、春の祭りには「雑神祭」が行われている。

こうした神社の再編成は、同時に祭りの統廃合をうながした、今日「満島神社のお練り」として知られる秋祭りは、各社の祭りを合せて新しくうまれたものといわれている。 参照 『天龍村史下巻 P820, 821』

^{こうたいじんしゃ}皇大神社——^{あまてらすおおみかみ}天照大御神をお祀りしている社

^{すわししゃ}諏訪社——^{たけみなかたのみこと}建御名方命と^{やさかとめのみこと}八坂刀売命をお祀りしている社

^{いなりしゃ}稲荷社——^{うがのみたまのみこと}宇迦之御魂神、^{とようけひめのみこと}豊宇気毘売命、^{わかうかめのみこと}若宇迦売神、^{うけもちのみこと}保食神、などをお祀りしている社

^{せんげんしゃ}浅間社——^{このはなさくやひめのみこと}木花開耶媛命をお祀りしている社 (^{うみさちひこ}海幸彦、^{やまさちひこ}山幸彦の母親)

^{はちまんしゃ}八幡社——^{ほんだわけのみこと}誉田別尊 (^{おうじんてんのう}応神天皇)をお祀りしている社 (武神、軍神)

^{やさかししゃ}八坂社——^{すさのうのみこと}須佐男命、^{くしいなだひめのみこと}櫛稻田姫命 (須佐男命の妻)をお祀りしている社 (祇園社、午頭天王も同じ)

^{なんぐうしゃ}南宮社——^{かなやまひこのみこと}金山彦命 (包丁の守護神)をお祀りしている社

満島神社では祭神が^{おおやまづみのみこと}大山祇命 (山の神) となっている。

私的な推察——昔大鍛冶が山で採集した砂鉄を精錬して鉄道具を作っていた、その畏敬の念を込め祭神が大山祇命となっているのではないか。

山の神——^{おおやまづみのみこと}大山祇命をお祀りしている社

無格社とは——第三六代孝徳天皇の大化の改新ののち、大宝元年 (701) に大宝

律令が制定される。その際 詔研とり^{ほうへい}奏敷ナニ宮社ホウハ 27

れ以外の神社と区別したのが社格しゃかくの起源である。

すなわち、律令制度が確立されると、国家のために神に靈験あらたかな神社が選ばれて、それぞれの祈年祭じんぎかんに神祇官を派遣して奉幣ほうへいがなされるなど、国家によって礼遇れいぐうされるようになったのである。奈良時代になるとその数は増加していった。

ところが、都の周辺の国はともかく、遠国えんこくともなると、神祇官が派遣されて直接、奉幣ほうへいすることは不可能と言ってよい、そこで、これら遠国の官社かんしゃには、国司が代わって奉幣ほうへいすることが延暦17年(798)に制定されここに官幣の神社と国幣の神社との別が生じた。

明治4年の太政官布告により、神官職制、神社規制が制定され、

神祇官所管の神社 官幣大社、中社、小社

地方官所管の神社 国幣大社、中社、小社

諸社として 府県社——府県で多く信仰されて

郷社 ——郷で〃

村社 ——村で〃

無格社 ——1部で〃

一の宮とは——国司は任命により任国に赴任すると、まず吉日を選んで、その国の主要な神社を巡って神拝する。それが済んでから、はじめて国政を執るのを例とした。

この際、最初に詣でる社を一の宮、次いで信仰の篤い順に二の宮、三の宮などを詣でる、これが今でも各地に伝えられている。

参照 『日本の神様事典』より

お練り祭りの概要

宵祭りには、夕刻に満島神社(原の森)から御輿みこしを中心としたお練りの行列が出発し、途中3カ所のお旅所(田村・長野・南の三地籍ごとに設けられている)で休憩し、南地籍の前宮(南の森)に到着。御輿は前宮に一泊する。そして、翌日の本祭りには、お練りの行列は前宮を正午に出発し、3カ所のお旅所をへて、本宮(満島神社)へもどる。つまり満島神社のお練りは神幸祭しんこうさい(神輿渡御みこしとぎよ)である。本宮の最後の行事「花取り」の終了するのは、毎年夜の9時すぎとなる。神輿渡御の形態で行われる祭りは、飯伊地区ではここ満島神社だけである。

お練りの途中に民家、商店、会社などの所望^{しよもう}がかかると、「かけ太鼓」・宿入れの「大名行列」・宿入れの「満島神社の神楽」の獅子舞・「傘づくし」の祇園バヤシのお囃子を披露し、ご祝儀を受けながら行列は進行していく。

参照及び詳細は 天龍村史下巻 P886～890

参考

金毘羅大権現——金毘羅神社・琴平神宮・金刀比羅神社は香川県琴平町鎮座の金比羅宮であり、祭神は大物主神（大国主命と異名同神）である。

金比羅とはサンスクリット語でクンピーラの漢訳で、ガンジス川に棲息する鰐の神格化した名であり、仏法の守護神として薬師如来十二神の一つで宮毘羅大將^{くびらたいしょう}のことである。鰐神は竜王（竜神）あるいは海神として、海難祈願、水難祈願、や雨乞いなど水に縁のある善神とされる。

秋葉大権現——本来の名称は「秋葉山三尺坊大権現」と言います。

信仰は、1に険難・2に火難・3に水難と言われていますが、庶民には険難、水難の信仰は少なく、もっぱら火難除けの信仰が深く根付いていきました、特に密集した木造長屋に住んでいた江戸庶民は火事を最も恐れていたもので、火難除けの秋葉信仰は大いに広まりました。東京に「秋葉原」という地名があるのも、その名残です。

「秋葉山三尺坊大権現」については、ネットで調べてみると、意外なことが分かります。